

2013年7月11日

講師：株式会社松栄堂代表取締役社長 畑正高さま

皆さん、こんにちは。松栄堂は昭和40年代、それまでの木造を解体し、ビルを建てました。その際に店舗を移して今は烏丸二条が正面玄関となっています。

私は若い頃、自覚していなかったのですが、最近同窓会などで昔の友人と一緒にになりますと、「おい畑、最近全然お香の匂いひんな」と言われるのです。「ええっ?」と言うと「お前のとこのお茶飲めへんかったなあ」と遠足にいった時僕のお茶が飲めなかったというのです。漢方薬を煎じたような味や匂いがしていたそうです。また、私の家を出したお菓子は持って帰っても犬も食べへんと、友達が笑って言うのです。それくらいお香の匂いのかたまりだったそうです。そんな中で生まれ育った私には全然自覚が無く、気にもならず過ごしていたのです。ところが学生の頃、しばらく海外に出たことがあり、季節が変わると母がセーターなどを送ってくれました。小包が着いて開けるとポワーンと匂いが出てきて、その時に初めて、あっ、これがうちの匂いか、と自覚した記憶があります。今から思うと玉手箱ですね。そのように育ってきましたので、あまり自分の中に疑問符を持たずに家業に入りました。大学を卒業する頃に、京都の古い商いをしているお家では、よその釜の飯を食べさせて貰うといって、銀行や百貨店など大きな会社に勤めさせてもらって、世間を知ってから家業に帰って来るというのがひとつのパターンでもありました。私の父もそういうことをだいぶ考えてくれていましたが、結果的には私の家はお香を作るメーカーですので、よそでネクタイを締めさせてもらうよりも、汚れ仕事を自分の会社でやった方がいいと、よそで修行せずに家業に入りました。

さて、よく「伝統」とはなにか、が議論になります。皆さんどのようにお考えですか。私は、伝統と言われるものは革新の連続でしかないと思っています。また私は温故という言葉がとても好きです。温故知新という言葉から、知新は？とよく聞かれるのですが、知新は、捨てました。言い換えると、温故にこだわるのが実はとても大切なことだをつくづく思うのです。常に何か革新的なことをすれば良い、と思いがちなのですが、自分の独りよがりとか、好き嫌いとか、感覚的な思い込みや、好奇心や、そういったものでアクションにつなげて、さも新しいことをしたかのように自己満足的に思い込んでしまうことが、良くない革新もどきだと思っています。こういうことをやってみたくて、と周りの人たちと相談しながら、面白そう、協力しようという声をもらい、一歩前へ踏み出した時、もう一度背中を見て、応援や提案の声をかけてもらえるような社会性と、周りの人たちから認知してもらえる新しい生きざまを説得力を持ってやっているかどうか生き残る革新です。それが振り返り見ると、連続的に続いた流れの中にある伝統と呼ばれるようなものになっていこうと考えるのです。ですから責任ある革新、社会

性のある革新というのを、責任を持って求めてアクションにつなぐことしかないと考えております。温故知新という言葉がありますが、知新というのは生きている限り新しいことをするわけですから、前向きに責任を持って生きるというのが知新なのです。知新は全くもって意識に留めるものではないのだと思うのです。一方、温故とは、歴史に学ぶということだと思っております。歴史というと苦手と感じられる人も多いかもしれませんが。しかし例えば「ビアガーデン行こう」と誘ったら「えー、ビアガーデン、昨日も行ったよ」と。昨日ビアガーデンで飲んだという過去を今ひもとして、今夜のビールはクーラーの利いたところにしてほしいという提案までしてるわけです。しっかり歴史に生きてることがわかるでしょう。私たちは、ごくごく身近な歴史をひもときながら、ごくごく身近な未来をちょっと考える程度のことを誰でもやっています。それが実は生きるという日常であります。しかしながら、それが実は歴史に生きているというような、たいそうな発想はもちろん持たないわけです。

では、誰もが日常的に使っているカメラ。今では、デジカメや携帯電話のカメラなどを誰もが日常使うわけですが、なぜ誰でもシャッター押せばそれなりに写真を撮れるかというと、ここには広角レンズというレンズが仕組んであるからなのです。私たちが日常、「昨日ビアガーデン行って汗流してビール飲んだから、今日はクーラーの利いてるところにしてよ」という、そのちょっとした昨日の記憶から今夜のビールの飲み方まで提案するというのは実は広角レンズ的な生き方だと思いませんか？ だれでもが当たり前に見ている風景にとりあえず焦点をどこかに当てておけば、パッと見える。例えば車を運転していて、「この辺の道路は最近きれいに整備されたな」と周りの風景を見るのは全部広角レンズです。ところが、「こんな他府県の遠いところから来てるんだな」とか、「夏休みでもないのに家族で遠くから来てるな」なんて思いながら前の車のナンバープレートを見る時には標準レンズ的に見るのです。私の意識そのものが、赤信号を見てブレーキを踏んだり道を選んで車を走らせたり、と考えるのは、全部広角レンズなのです。でも信号で止まった時、「前のタクシーに外国の人乗ってはるわ」とか、「タクシーの運転手さん女性のドライバー、ああすごいな」とか、いろんなことを考えながら他の車の様子を見るのが標準レンズ的に見ていると思うのです。そして、「今度どんな車に買い換えよう。あの車は何て名前かな、ちょっと控えておこう」という時、急に望遠レンズ的にものを見ていると思いませんか？

私の父が私くらいの年の頃、非常に忙しくしていました。ほとんど会社におらず様々な団体の役員などを熱心にやっていたことを思い出します。ああそうか僕の年のころの父はあれほどの仕事してたんやなと。そういうことも考えるわけです。だとしたら今の私の程度では、まだまだ社会貢献できてないな、と。私も多く社会的な仕事をさせてもらっていますが、それをさせてもらえるのも、父に支えてもらえた松栄堂という会社が

社会的にそれだけ安定した基盤を持っているからだと思います。感謝しています。そういえばそれだけの仕事を父はしていたなあというのが標準レンズ的なものの方を向くように私は思うのです。

また、終戦間際の京都の町で生きた人々はこの暑い夏に祇園祭をどうこなしてたの
だろう。祇園祭って昭和何年から復活できたのだろう。戦時中の祇園祭はみんなどん
なふうにご覧になったのだろう。本当に長刀鉾は女性が乗ったことがないの
だろうかとかね。今年も長刀鉾は鉾建てが無事に行われていたが、では戦時中
はどうしていたのだろう、などとちょっと調べたくはないですか。というふうな
ことを急に望遠レンズ的にものを見てるように私には思えます。応仁の乱の
後の京都のまちで祇園祭が復興された時代は、この暑い夏にどうやって健康な
体力を維持していたのか。昔の人の知恵ってどういうものだろうかという見
方にどんどんと発展していくのです。それがなるほど、というように私の
今の生き方に反映していくのです。それが実は知新なのだと思います。私
自身が現代日本のこの京都という町に生活と生活の基盤をいただいて、毎
日ポジティブに生きてる、それが私の知新だというふうに思うのです。知新
とはこういうもの、とことさら取り上げる必要はなく、ただ、知新というの
が少しでも社会的な意味を発揮するためには温故ということを真面目に取
り組み続けたいといけないというのが私の考え方です。

お香の世界を考えた時にとっても面白いことを発見します。例えば、この龍谷大学の建
物の一番上の方から見える景色が素晴らしい。京都の愛宕山から比叡山まで見える
のですよ。夏の深い緑に包まれて京都の北山からずらーっと比叡山までが一望に見
えるのです。そのことを書いている文章があります。『源氏物語』帚木「すくよかなら
ぬ山の気色、木深く世離れてたたみなし」という文章です。すくよかな山の景色と言
いますと、この窓から見えるようななだらかな山です。力強くグングン伸びて、天を突き
破るほどの勢いの山ではなく、まるく柔らかな山の姿です。「すくよかならぬ山の気色、
木深く」は木が深くうっそうと緑が茂っている様子、「木深く世離れて」というのはこの
辺に人の暮らしがたくさん見えるのです。家がたくさんあって、煙が立ち上ったりして
いる様子です。世というのは人々が住む世です。「世離れてたたみなしていく」という
のは、重なりあっているということです。そしてその後書いてあるのは「けぢかき籬の
内をば、その心しらひ おきてなどなん」。「けぢかき籬の内をば」とは、もっと近く
のこの邸を囲んでいるこの垣のある中を見てみると、ということです。どうでしょう、今こ
この屋上に上がってください。「すくよかならぬ山の景気色、木深く世離れてたたみなし」
という景色がそのまま見えます。そして「けぢかき籬の内をば」。この龍谷大学のキャン
パスをぐっと下へ眺めてみると「その心しらひおきてなどをなむ」。そのキャンパスを、
どのように整備するかという人々の工夫や、知恵、例えば自動車や自転車の通る道、
木陰で休むところ、通路として使うところ、などというふうなことが整然と「心しらひ」=気

を使って整備している人の暮らしの文化的な世界というのが見えるのです。どうでしょうか。1000年昔に紫式部が『源氏物語』という小説の中に書いている内容なのです。私はこういうことに非常に驚きを感じてしまうんです。1000年昔の小説の中に何故今ここにあることを、彼女はこんなに具体的に書いているのかと発見すると、見てみたいとも思うし、人にも教えたいと思います。

同じように考えると、枕草子の冒頭の文章。「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少しあかりて」というあの山際というのは東山の山際だということを気付かされてしまうのです。学校の先生はなぜ文法ばかり言って、このことを教えてくれなかったのでしょうか。あの東山の山際が、「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく」ということを、あの時あの先生がちょっと一言言ってくれていたら、全然イメージが違ったと思います。神戸などに行く機会があると、いつも私は自信を持って言うのです。神戸の街は太陽も明るいいし、海の風が吹いて、ケーキ屋さんパン屋さんも美味しくて大好きです。でも神戸の街で六甲山を見ていると枕草子のあの冒頭の文章は分からないのです。是非2月の節分明けぐらいに京都へ来てくださいと宣伝するのです。日本人なら誰もが知っているあの文章ですから。「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際」それが京都の東山、あるいは奈良の東山でもいいんです。あの距離感。それを実は1000年も昔の人がきちっと文章に書き残し、そしてそれをずっとみんな暗唱するかのよう に語りついできたというこの恐ろしさに気付くかどうか。それを次の世代に私たちが語らなかつたら、誰がそれを語り続けるのでしょうか。

今から120~130年前に「語り続ける」ことを忘れかけてしまった時代がありました。明治維新の時代です。鹿鳴館時代に洋館を建てて皆が夜会服を着て、毎夜クラシックの音楽に合わせてワルツを踊ったりしていたのです。とても華やかだったと思いますが、その時代が済んだ後に何が起こったかということが大切なのです。明治時代を一色で考えてしまうと見えてこないのですが、明治時代というのは45年もありましたので、10年単位ぐらいで見えていくととても紆余曲折があったことがわかります。嘉納治五郎という方をご存知ですか。柔道の創始者だった彼は、元は柔術家でした。江戸時代はずっと柔術だったのです。それぞれの藩の流派があつたり、大きな藩になると柔術は複数の先生がいて、両方が年に一度お殿様の前で試合をしたりということがあつたのをご存じでしょう。しかし明治維新になって、みんな鬚を切って刀も捨て、洋服を着て、そして夜会服を着て踊るようになった時代になると、誰もそんな柔術の稽古に行かなくなってしまうのです。このままでは日本の柔術は本当に消えてしまうという危機感を持った嘉納治五郎は全国の柔術家をめぐって、こういうルールで一緒にやりませんかと言説をしていくわけですが。みんな、何をお前は言うてんねやと勝負を挑み、彼はそれに勝って、説き伏せ一つにして柔道という世界が生まれるわけですが。そのおかげで今日オリンピックの競技種目にまでなりました。ヨーロッパでも柔道を勉強したいと思

う人が多く生まれているのではないですか。それまで各藩のレベルの柔術だったものが、インターナショナルになったわけです。それを見てなるほどと思った剣術家も弓術家もみんな自分たちの世界はこれでは廃れてしまうと危機感を持ち、弓道、剣道になっていったのです。このように考えると、明治維新以降、その後の明治になって10年、20年、30年経つ間にどれほどの知恵を働かせて熱い思いをたぎらせ、人々を説得しながら新しい一步を踏み出していった人々が歴史を作ったかというのが見えませんか？

お香も同じように、大変な社会的な変革の中で、家業として私の先輩世代は本当に苦心惨憺してたと思います。そうなるとお香はその時代どうだったのかということをお勉強したくなります。その為にはお香のことだけ見ても分からない。お香以外の物がどうだったかということを見ると、香りの世界も同じようなことだったんだな、ということに気付かされるのです。

今日はお香の材料を持ってきました。まず、白檀です。これは天竺から来たといえます。1400年も昔に、お釈迦様の国から来たのです。これは聖徳太子の時代に天竺から届いたのか、と聞いて手に持つと、冷たくて硬くてふっと香りがして。もう疑う余地はなかったと思います。お釈迦様の国から来た、それだけで圧倒されたと思うのです。それが日本人と外国との出会だったんです。それならばこれをどういうふうにするか。これを彫刻して、この中からお釈迦様のお姿にお出ましいたきたいと願う気持ちが起こってくるんですね。それは檀像といって、お像を彫る時の材料の話になります。もちろんこの白檀というのは、1400年も昔の当時は次いつインドから来るか分からないじゃないですか。だったらそれに代わる材料を探さないといけないということで最終的には楠やケヤキなど、そういう彫刻材が広まっています。それは聖徳太子から奈良時代、平安時代と発展していく日本の仏像の歴史になるのですが、もともとはこの白檀という世界から始まったのです。白檀は、白いから白檀です。黒いと黒檀。紫だと紫檀ですね。みんな何か有名な木ですよ。何故でしょうか。共通している文字の檀という字を調べてみると、どうも人類の生活に非常に役に立つ善なる木を檀という字で表現していたようです。

一方、こちらの木は沈水香木といえます。沈むという字と香ると書いては「沈香」と読みます。木ですが水に入れると沈むのです。初めてこれに出会った人たちはとても不思議だと思いました。水に入れると沈む。そして木だから燃やしてみるとものすごい匂いがする。ですので、また火から取り出してそれこそ聖徳太子の手元に届けました。それがこの沈香との初めての出会いでした。残念ながら白檀も沈香も日本では採れないのです。聖徳太子も海の向こうから届いたものを初めて手にされて、これはどういふものだと、人々に語られたという記録は日本書紀や聖徳太子の伝記に書いてあり

ます。1400年昔にこれに初めて出会って、人々は非常に驚いたのですが、21世紀の今日に至っても、私がおもったいぶって持ってきました。なぜおもったいぶって持ってくるかというと、簡単に出会えないからです。どんなにがんばって畑を耕してこの木を植えたとしても、日本ではこれは採れません。日本という国がそれほど温暖な恵まれた地域にあり、このクセの強い香りが育つような国ではないのです。ですから、今日これに出会おうと思うとやっぱり海の向こうから運んで来てもらわないと出会えない。そういう素材なのです。この国で採れない素材、それを私の家は生業にしてきました。なんと変わった商いをしてると思ってしまうんですね。よく考えたらそのように日本で採れず海の向こうから運んでもらうものは沢山あるのです。一番分かりやすいのは漢方薬。例えば朝鮮人参や香辛料なんかもそうです。松栄堂は烏丸二条というところにありますが、二条通という通りが薬の街というのはご存じですか。今でも神農さんという薬の神様のお祭りがあります。京都の二条通という場所は漢方薬の街なんですね。町名を見ていると丁子屋町なんていう町があります。江戸時代の鎖国している最中に漢方薬が海の向こうから渡ってきて集まった街なのです。不思議なところだと思いませんか？ その先、二条の先はどこにあるのかわかりますか？ 大阪の上方の街にも道修町という街があって、やはり漢方薬の街なのです。その大阪の道修町の先はどこだったか？ 長崎の出島だったと思いませんか？ 江戸時代ですよ。何か見えてくるじゃないですか。出島だけかと思ってたらどうもそうじゃないということに出会ったりするんです。

お香の原料の中に、丁子(クローブ)というものがあります。みなさん口にいられたことがあるはずですよ。香辛料か、あるいは漢方薬かもしれない。この丁字は、まず丁子屋さんという屋号があります。また丁子屋町という町名もあります。10年以上前ですが、とある京都の丁子屋さんが全国の丁子さんや、丁子屋さんに声を掛けて「丁子サミット」というのを開かれたことがあります。その方から依頼をいただき、丁子が何たるか、その機会に講話をしたことがありました。丁子がどういうものか現物を持ってきて欲しいと依頼されました。私も勉強の機会だと思って丁子のことをいろいろ調べました。丁字そのものだけでなく、丁子文様とか、丁子の形をした古い陶磁器とか、丁子を使う時の丁子風炉という風炉だとか、いろんなものを展示して、お話をさせていただきました。その講演の後、鹿児島から来られた丁子さんとおっしゃる年配の男性が寄ってこられ「今日は京都まで来てよかった。あんたの話はよかった」とおっしゃるのです。その丁子さんは、生まれてこの方何故自分の名字が、甲乙丙丁の丁なのか、ずっと子供の時からそう思っておられたそうです。日本男児として生まれたからには日本の兵隊にならないといけない時代に生まれた人たちは、身体検査を受けて甲種合格という判子を押してもらわないと友だちから馬鹿にされたのです。昔は甲乙丙丁というようなランキングがあったのです。体格がよく身長もあって健康体なら甲。そういう中で乙を

押されてしまうと軟弱呼ばわりされてしまう。そんな甲乙丙丁の丁子という名前を生まれてこのかた持っている人です。もしかしたら子供の時から友だちみんなに笑われていたかもしれません。生まれてからずっと不合格の烙印を押されているような気分だったのではないのでしょうか。その男性はずっと75歳になるまで、自らの名字を残念に思っておられたのです。しかし私はこの男性に出会ってつくづく思いました。薩摩で丁子さんというお名前は、これは島津家が琉球貿易の中で手に入れる丁子を集め、扱わせてお家ではないのでしょうか。もうちょっと家のことを調べてみてください、と思わずお願いしました。島津家にとって琉球から入ってくる南蛮渡来のものを扱うというのは非常に大切で経済的な、あるいは情報収集の手段だったことはなんとなくご存じでしょう。しかし、学校で習った江戸時代は鎖国の時代で、出島だけがオランダと中国だけに開かれ、出島だけが外国とコンタクトをとる窓口でした。100%そうであったとは思っていませんが、大変現実的なものにふっと出会ってしまった貴重な発見でした。鎖国の時代にオランダの船しか長崎に入れなかったということをご存じでしょうが、アメリカの船が入っていたのを知っていますか。私はこの話に出会った時本当びっくりしました。ボストンの少し南に、捕鯨博物館というのがあります。日本人としてぜひ知ってほしい事が2つあります。アメリカの捕鯨船がオランダの旗を借りて船につけて長崎の港に入ったという歴史があるんです。それはなぜかというとオランダはその時インドネシアの方面、香料諸島の方で戦争をしていたのです。ですから日本をメンテナンスする余裕が無く、日本へ入港する権利をアメリカの船に売っていたわけです。だからそのオランダの国旗を付けたアメリカの船が長崎に入ったのだそうです。これも本当に驚く話です。

もう一つ、捕鯨反対運動をしているアメリカ社会のごく一部の人がおられるのはいいのですが、歴史をきちっと学んでほしいと思うんですね。アメリカの歴史には捕鯨のために世界に船を出して情報を集め、経済を成り立たせた時代があったんだということ。またその昔ジョン万次郎は土佐の海に出て漂流民になり、15人ぐらい一緒に漂流し、小さな無人島に命からがら上陸して、そこで命をつないでいくのですが、なぜか波打ち際に大きな肉の塊が上がるんです。それを食べ物として食いつなぐのですが、それが実はクジラの肉なのです。なぜかというとその時代の捕鯨船は鯨の油を絞るけれど、肉は腐ってしまいますから持ち帰るつもりもありません。船上で肉を炊いて油を絞り、そしてその肉は全部海へ捨てたわけです。そして島へ流れついた肉を食べたジョン万次郎たちは命をつないだのです。良いも悪いもそれが現実だということを知れば、それぞれの文化圏を尊重する気持ちが生まれると私は思うのです。

さて、お香というのは聖徳太子の時代も今の時代も海の向こうから運ばれてきたと話しましたが、聖徳太子の時代にまだ日本に入らなかったものでぜひ意識してほしいものがあります。「茶」です。お茶は、聖徳太子の時代にまだ日本に紹介されていなか

った。お茶より、お香の方が日本に紹介された歴史が古いのです。もっと古いものがあります。お米です。お米ももともとこの島国になく、南の方から紹介されたものです。米も香も茶も全部、この島国にはなく海の向こうから入ってきたものだということに、なぜかしら私たちは、ごく当たり前に日本語として「日常茶飯事」と使っていませんか？ごく当たり前にやってしまうことを日常茶飯事と言ってごく当たり前に使います。何故、米と茶は日常と言い切るのか。なぜ茶香飯事ではないんだろう、と香を商っている立場で私は思うのです。でも気が付かされるんですね。香は日常にならない。なぜかと言ったら日本で採れない。茶と米は日本で収穫できるのです。そういったことに気がつくだけで、香りの世界というのは日常的な生活アイテムにしてはいけない、日本人にとって非日常な生活文化なのだということを教えられてしまうんです。ですからそのことを誰よりも熱く強く深く思わないとお香というものを商いとして扱う立場にはなれないと私は考えているわけです。だから、会社に入ってくれる若い人たちにも面接の時に本当に松栄堂という会社でいいのかとよく言います。どういうふうに魅力的に思っているか知らないけれど、松栄堂が扱っているものは本当に非日常的なものでしかないよと。それが実は私たちが扱っている香という生活文化なのです。こういったことも歴史を学べば学ぶほどその本質が見えてきます。それを21世紀の生活文化としてどのような提案をするかというのが私の仕事であり、それが実は温故という言葉なのです。

いろいろな素材を見ていただきましょう。クローブです。さきほどの丁子です。ホットウイスキーなどに少し落とすとふわっと、とてもいい香りがします。殺菌力の強い油がとれますので、この丁子の油で日本刀の手入れをします。ですから江戸時代のお侍さんの世の中に、クローブというのがどれほど貴重品であったかが分かります。これは八角、スターアニス。麻婆豆腐にも入っているので皆さんもきつと口にすることがあるでしょう。日本の匂袋を作るのにもこれがないと頼りない香りになります。残念ながらこれも日本では採れません。これはシナモン。京都の八つ橋のあのフレーバーです。シナモンティーとか、シナモンクッキーのシナモンですね。和ニッキという日本国内で採れるニッキがあります。それなら別に日常か思うのですが、実は和ニッキというのは不思議なことに和ニッキの木の根に香料が集まるんです。ですからニッキ餅を作ろうと思えば山へ行ってニッキの木を掘り起こして根っこをいただかないといけない。その木の命を全部いただかないとニッキは使えなかったのです。ですから年に1、2回の祭りの時にニッキ餅を作るというのはみんなとても嬉しかったろうと思います。

「乳香」はイエス・キリストに届けられた、聖書に出てくる香料です。そのようなものまで含めて私たちのお香の世界にありました。歴史の中に届いていたのです。

私がとても好きな榎の木が御所にあります。梅が咲きだす2月の中ごろでしょうか。まだ寒い季節で、日が非常に短く朝も遅いのですが、横から冬の朝日が斜めに差し込みます。すると葉が全て散ったまさに冬枯れの姿でも、朝日が当たるとモノクロ写真のようにコントラストがとてもきれいな木なのです。早朝に行くと、木の根っこに腰掛けてフルートの練習をしている学生さんがおられたり、お年寄りがよっこらしよと一汗拭いておられるような時もあります。そうかと思うと昼頃には子供たちがお弁当を広げて木陰で楽しんでいることもあります。秋になると落ち葉が素晴らしく、絵を描いたり、写真を撮ったりと、いろんな出会いがあります。人間だけではなく、上の方には鳥も巣を作っているし、他の植物が宿り木をしてたりもします。この木がこれほどに大きく頑張っているおかげで、さまざまな社会性というものを展開していて、いろんな形でこの木の存在を享受しているものが世の中にいるのです。しかし、この木も枝をのばしすぎると、他の木や電線にぶつかったりしますから、時々枝を切られてしまったりするんですね。ちょっと頑張りすぎだ。そうやって頑張ってもネガティブな要素も生んでしまうというのがそれぞれの存在なのです。しかし、今申し上げた話は、全部この地面から上の、私たちが目で見ているこの木の存在でしかありません。実は、この木がこれほど立派に育っているためには、地上に見えているのと同じぐらい地下に、その存在力を発揮していることを気付くべきだと思うのです。この木の地下にどれほどの根っこがあるのか。その木がその根っこを伸ばす時に、誰がその根っこにもっとこういうふうに伸ばしなさいとか、伸ばしすぎだ、とか文句言ったり、構ったりしますか？誰もしません。ほとんど誰もそんなことに意識を留めません。人が関わり、話題にしているのはこの上に見えている部分だけです。そしてこの木にしてみれば、それは結果でしかありません。目に見えているものの存在力というのはこの見えていない部分によってあるわけです。この木が何十年、何百年のちに命を終えた時、この地下にある根っこに栄養を与えていた土壤大地がレベルダウンしたらどうなりますか？何のためにこの木はここに存在したのか？この木が命を終えて世を去る時、少なくともこの下の土壤がプラスアルファになってほしいと私は願います。そして次の世代に後を委ねられたら幸せだと思うのです。この木の本懐というのは自分をここまで育ててくれた土壤をより豊かにして次の世代にゆだねることだと思うんです。次の世代が何になろうがそんなことはこの木には一切関係なく、それはもう次の世代に自信を持ち、信用して後を任せばいいのです。私たちの生き様というのも全く一緒だと思います。みなさんはどんな土壤にどんな根っこを伸ばし、どんな栄養を得ようとしているのでしょうか。こうでないといけないと、こういう根っこを張れと、誰かに強いられていますか？そんなことはないと思います。どんな本を読み、どんな人の話を聞こうとするか、何を食べようとするか、どんな勉強したいと思ってるのか。全部自分の中に選択肢はあるはずですが。選ぶチャンスとその方向性を見つけていく力というのは自分の中から湧き出さないと何も見つからないのです。どういう根っこを張ろうかと、自分なりに一生懸命、手で掘

って根を張ろうとしていると、通りかかった先輩が、これを貸してやろうと道具を貸してくれたりします。あるいは別の先輩がこうするんだよと教えてくれたりします。だから、素直にそこに甘えていくことがとても大事なんですね。

ここにお香を焚いている絵をご紹介します。道具や器の種類、使い方など歴史に学びながら様々なことを考えます。香炉の上にガラス板みたいなものが乗っていますが、これは雲母というものです。私も雲母を使用して焚くことがあります。その時、火が強すぎて煙が立ち上ったら失敗です。では、この絵の煙のようなものは失敗した様子なのでしょうか。私はこれは 煙ではなく「香り」だと思うのです。この絵によって、香りが立ち上がる様子を絵に描くと、煙に見えてしまうことを学びました。そう思って、昔の絵を色々見ると、これも香りではないかと思うものが数多くあります。東京国立博物館にある、江戸時代の肉筆浮世絵『遊女聞香図』もそうです。女性が懐手をして胸元を少し緩め、双六盤に腰をかけ、足元にはお香の道具が置いてあります。胸元からふわっと煙が立ち上っています。香炉は描かれていませんが、懐手をした着物の中に、香炉を持っているのです。これがもし煙だとすると、絶対咳き込むと思いませんか？

浦島太郎も玉手箱を開けて、煙に当たってお爺さんになってしまったと解釈されています。しかし実は、懐かしい香りに出会い長い間異国で過ごし、現実に戻った時には、年老いた身になっていた、という物語だと私は思います。この話は、実際に京都の丹後にある浦島神社の宮司さんまでお話を伺いに行ったことがあります。あの煙は、蘭の香りで女性の香りを表しているのだそうです。

(歌川国貞「源氏後集余情」を見せながら)この赤い短冊の文字は何と読むのでしょうか。私も初め「げんじごしゅうよじょう」と読みました。しかし、煙が香りだと気づいて3年ほど経って、「げんじごしゅうよじょう」が「げんじごじゅうよじょう」と読めたんですよ。「五十四帖」と書かなければ、試験では間違いですよ。これは木版の錦絵ですので、1825年～30年頃の江戸時代・幕末前の化政文化の頃でしょう。ちょんまげ頭が大流行してもはやされた時代に生きた人が、難解な源氏物語五十四帖を、「後ろに集まる余った情」などと書いて楽しんでいたのです。

21 世紀になった今日でも、そういった本があります。「あさきゆめみし」という漫画は『源氏物語』をテーマにしている、私も全巻持っています。何人もの女性が出てきますが皆同じに見えて、私には誰が誰だか分かりません。現代語訳「源氏物語」では、私はお香に関する部分を読み、原文と比較しながら何度も考えます。また、大摺源氏物語「まろ、ん？」という本もあります。この本は、光源氏が自分のことをまろと呼んでいたと仮定し、主人公を栗のキャラクターとして、ライバルの螢兵部卿宮をそら豆として描いています。ですが解説付きで、きちんと五十四帖を展開して見せてくれる本がある

ことに感心します。180年、200年近く昔に、庶民にも「源氏物語」への関心を広めた人たちがいたということをぜひ知ってください。先ほど言った「すくよかならぬ山の景色、木深く世離れてたたみなし」という文章も享受したことになります。21世紀には「まろ、ん?」を書く人もいる時代、私はお香のメーカーの責任者として、どのようにその香りを提案していけば良いのかを考えます。それが私にとっての温故であり、私の生き様は知新であってほしいのです。現在でも大まかに文字を読めば共有することができる文化圏にいて、それを商いにしている私は、一体何者だと単純に考えてしまいます。ぜひ皆さんが京都について考えるヒントにいただけたら嬉しく思います。自分の世界だけを一生懸命見ていると、視野が狭くなり、外の世界が見えなくなります。他の世界を見ることで、自分の世界を見直し、新たな発見をしてください。

最後に、私の大好きな「源氏物語」の「若紫」の場面を紹介します。京都の北山のお寺に行った際、女性たちの暮らしぶりを見つけた光源氏は、中の様子を覗いてしまいます。そこにいた若紫という女の子に、見入ってしまうシーンです。男性が女性たちの暮らしをこのように覗いていたらどうしますか。光源氏の横にもう1人友だちがいて、一緒に覗こうと誘おうとしています。これは大変面白いことです。今日の私たちの生活の常識観でこの状況を見ると、彼はストーカーをしていることになります。しかし、1000年前の光源氏が生きた時代の常識観では、垣間見るという行為は大変紳士的で知的な、わきまえた素晴らしい生活態度なのです。女性たちも光源氏が垣間見ていることに気付き、非常に心地よく緊張感を持つのです。だから若紫の帖ではこの場面が描かれるのです。歴史を学ぶ私たちにとって、必要なのは慮る力なのです。そのことを全く考えず、自分の日常の広角レンズ的に見ることはやめましょう。これは現代社会人同士のお互いの距離を慮る力や、友人と何か決める時にも繋がります。私は、「思いを測る力」が非常に重要だと思います。松栄堂が、今後どのように企業活動を展開していけばいいのか、思いを測るのです。これを鎌倉時代以降、ずっと人々は憧れて描いてきたわけです。何故、21世紀の現代社会では理解されないのでしょうか。私たちは日本の心を何処かへ置いてきてしまったという疑問を持つべきなのです。慮る力を引き出さないと、自分たちの広角レンズ的なものの見方で、これはおかしいと判断してしまう。私たちが日常で得ているコンセンサス、常識、相互理解などは常に流動的です。こうあるべきだと決めつけることは何もありません。1000年経って、これほど常識が変化するのだから、将来どういうコンセンサスを社会の常識としてお互い共有すべきかは、常に流動的だと教えられたのです。ぜひ、歴史に学ぶ面白さを楽しんでいただきたいと思っております。こういったことを考えながら、会社の若い世代の人たちとお香の世界をどうビジネスしたら良いか考えています。どうもありがとうございました。